

京鹿子

月刊 10月号 10月号 10月号



2月号

豊田都峰

灌響集 その三十

月のこしすすきに枯れのはじまれり
山の端を少し借りゐる冬夕焼
雑木山よこふた筋の冬夕焼
海鳴をひとつのせたり冬夕焼
河豚食べて川すぢの灯にもどりけり
谷すぢをさらに刻みて薬喰

寒 星

丸山佳子

嚴 冬 に 耐 ふ る 力 の 石 を 蹴 る
大 寒 の 地 に つ ま づ け ば 血 の さ は ぐ
夜 を 徹 す い の り の 肩 に 雪 降 り つ む
寒 林 を 通 る な す べ き こ と あ り て
寒 星 の 息 づ く 下 に 小 さ く 寝 る

秀華採集

ひと言を温めてゐる草の花

井尻 妙子

温める「ひと言」と「草の花」の響き合いがたいへんよい。難しい言葉・切れ字などなくても、俳句は十分に作者の思いを伝えることが出来る。そのさりげなさを味わってほしい。

びつしりと木の実草の実明日は晴れ

畑 佳与

寝て起きてはや八十年冬構

岡本 一路

前句の「明日は晴れ」の結び方もさりげなさからきている。その点後句の結びの「冬構」には重さがあるが、上中の描写にさりげなさがあるといつてよい。

鈴鹿 仁

新ごよみ

冬日逃ぐからす不在の烏丸

着ぶくれて世渡りさぐる町すずめ

年新た一家の中の猫の位置

新暦ひらく未来の音がする

験担ぐならはしあれど松七日

近 詠

和田 照海

牡丹焚く

秋夕焼かごめかごめの鶏はゐず

牡丹焚くまだ青雲のこころざし

釈尊の扁平足や榎櫃の実

伊予灘へ一気呵成のいわし雲

野も山も素秋に入りぬ水の唄

祝豊田都峰第九句集「水の唄」上梓



神麓集

敬老日 北村 香朗

妻若く逝きて独りの敬老日
 小鳥来る今日一日のはじまりか
 よく晴れて今日のはじまり小鳥来る
 さらさらと祥月命日花八手
 眼まなこしん蛸が秋のバラ園邪魔しをり

雪 螢 藤岡 紫水

菊の香や小御所に古き経机
 庭師来て十一月を整へぬ
 返り咲く一枝を宙に老桜
 夕月の匂ふ高さに雪螢
 遠きゆゑ会釈も深くお茶の花

松田 都青

寝そびれてヘルマン・ヘッセとある深秋
 数珠玉を繰れば智に揺れ情に揺れ
 陰口も何処吹く風の秋日傘
 引けば出て押せば引き込む秋愁ひ
 秋灯下混じる恋文離縁状

二月盡 竹貫 示虹

梅咲くや水琴窟にはげまされ
 浅春の松籟生まる釜の湯に
 日だまりに墮天のいろの犬ふぐり
 春の日や生まれてすぐに欠伸の子
 食べて寝て欲はわづかや二月盡

紅葉 柴田 朱美

紅葉闌け平衡感覚狂ひだす
 ぬくもりに一步手前の櫛紅葉
 青炎の不動紅葉を呑みこめり
 水郷を抜けて生家へ紅葉浴び
 紅葉紅葉微熱のやうな夕茜

深悼・高木智氏 彌寝 瓶史

玉すだれ靈澄む界へ発ちしあと
 夢二疎水小石はふりし鮎棲ま
 稲舟も田も消え邑久は町すがた
 懐旧や夢二生家の葡萄熟る
 月見草他生の縁の一番星



日短 丹生をだまき
光り落つ点滴々秋の陽に
百歳の詩集に押され冬用意
ソーラー時計ときどきつまづき日短
何するといふでもなくて日短
空白もそこそこ有りて古日記

師走来る

山田をがたま

天へ届く棚田勤労感謝の日
悼みつゝ住所録消す師走来る
身辺の片付け遅々と師走来る
歩行練習百歩に満たず師走来る
風邪気味の微熱続きの無為の日々

金柑丸井巴水

山越えて来し木枯しの啜り泣き
金柑の空あをあと星座組む
針千本休め嵐山しづもれり
剣山の胎児となりて冬眠す
雪女寝起きのこゑの研あり

大壺に面構へあり霧の中寛
竹林は胴から沈む西入日
言霊は木霊でありし霧峠
白兔つめたくもあり月の海
我輩は猫丸くなくなる冬構へ

小堀



京鹿子集

豊田都峰選

ひと言を温めてゐる草の花

京都 井尻 妙子

ペン皿に溜まるクリツプ文化の日

秋深む母のしづかな箸使ひ

身離れのよき魚若狭しぐれかな

びつしりと木の実草の実明日は晴れ

鎌倉 畑 佳与

一週間に一度のくすり石路咲いて

何だ何だ鴉群がる冬の浜

実南天ぬれ紙いろの日暮れくる

寝て起きてはや八十年冬構

京都 岡本 一路

すつぽりと兼六園は冬構

逆転のボール小脇にラガー突進

十歩過ぎ踵返せりおでんの灯

荒野にて咲く白菊にオーラあり

志高くと師の声ぬのこづち

どんぐりを拾へば子等の顔に似て

アリソナ 伊吹 之博

五線紙に想ひ出つづる秋の午後

照葉峡カメラの列に秋高し

稲を刈る恵みを感じ被災の地

稲抜き機飛び立ち群れる稲雀

皆笑顔年令それぞれ秋の旅

澁川 東 秋茄子

秋冷や馴染みの茶房で書を聞く

さまま 神田 惣介

秋の陽を全身に浴びヴィーナス像

庭先の柿の樹実り孫集ふ

妻と居て寡黙にテレビ夜長かな

釣瓶落しの韻を弾きぬ沼の壁

猿の腰掛晩秋の沼みるために

森に鶉慟哭の故郷復興のくに

老いてなほ柿は朱色につつまれり

秋蟻を踏んでしまつてからの老い

セロファン製の震へをほどく秋思かな

紙切れとなつた晩年いわし雲

クロスバズルの空白ななかまど真つ赤

晩秋や水音に耳聴くゐる

冬の日を味はふやうに松一樹

山褰の翳を濃くして紅葉山

冬晴の山には雲が良く似合ふ

台風一過チキンカレーの出来あがる

うどん屋の閉店の謝辞花おしろい

星月夜恙無き日の姉二人

吸つて止めて肺の検診嗚日和

落梅のころばぬままにつぶるる路

岡田 愛子

旅の友語り残せし木の葉髪

山茶花の垣へ近々今朝の路

藁塚の日暮は桶となりて佇つ

風吹けばむらさき増ゆる花野かな

石ひとつ滑らせてゆく秋の川

鴉一声天の高さを筒抜けに

釣舟の渚煌めく小春かな

小春日や小姓ちびつ子合奏会

天高し瘦せがまんの食太りくる

行楽の輪の声高し小春の野

車窓より飛び込む句種豊の秋

雑草の空は海風秋深む

修禪寺の古面歪む秋の声

臥待の楊貴妃の背しだらでん

鈴生りの銀杏明日は日曜日

晩鐘の川をゆつたり秋夕焼け

赤とんぼ群れてボールを見失ふ

鴉鳴いて森のアトリエ彩を増す

「団栗だ」笑顔ものせる掌

つかの間の十三夜には合鍵を

とりかぶと古今を語る切通し

習志野 上野 紫泉
十三夜天降言かや母の声

高野 春子

浦安 安出 一郎

松戸 児玉 有希

岡山 敦子